



▲ クンシラン 秋原家からいただきました (4月5日撮影)



金光寺寺報
第237号
発行所 金光寺
宮崎県西臼杵郡
五ヶ瀬町大字鞍岡
5927番地
☎ 0982
83-2338

今月法語カレンダーのことば

如来さまより最も遠い身が 実は最も近い身であった
和氣良晴

阿弥陀如来の光明に照らされて教えに生き
ているからこそ、自ら煩惱を抱える愚かさ
に気づかれます。和氣師の『「慶ばしいかな」の人生』には
「如来さまのご本願に出会ったときに、その智慧の光に照らされて浮かびあがる私の
生きざまは、『悲しきかな』としか言いようのない姿でありましょう」とあります。そして、
「私の『悲しきかな』という暗さは、そのままです。すでに確かな光のなかに照らされて
いたからこそ、その暗さがいっそう光のなかで鮮やかになるのです。(中略)光に、す
でに照らされていたのでありましたという驚きでもあり、大きな感動でもあります。如来さ
まより最も遠い身が、実は最も近い身でありましたと転ぜられることへの感動であります」
と、阿弥陀如来の光明に出会ったよろこびが語られています。

弥陀の光明に出会う前は、とても遠く感じ
られていた存在が、その光明に摂取され、教
えに生きる中で、阿弥陀如来が最も身近な存
在であったと受けとめる世界があるのです。
そして、「すでに照らされていた」と述べら
れているように、阿弥陀如来の光明は私が気
づくよりもはるか前からあきることなく照ら
し続け、育ててくださっています。教えに出
会ったからと気づいたのは私です。しかし、
私が教えに出会ったのは、私が気づくよ
りも前から育てていたからです。育てて
いたことにも気づかず、遠い存在だと思っ
ていたのは私でした。そのことに気づく時、阿
弥陀如来はもう遠い存在ではありません。誰
よりも、最も近いのです。

(本願寺出版社刊「大乘」誌掲載
『月々のことば』より抜粋 転載)

仏事お休みのお知らせ

下記の日には緊急を除き仏事はお
受けできません。ご協力をお願い
します。

◎ 4月 23日 終日

初盆会について

本年8月のお盆に初盆会をおつと
めになれるお宅でお参りの希望時
間がある所はお早めに連絡ください。
申し込まれた順に時間を決めていき
ます。

本年3月に次の金光寺門信徒の方
がご往生なさいました。謹んでお悔
やみ申し上げます。

- 2021年 3月 8日 満87歳
スクナ原 那 須 春 男 様
- 2021年 3月 9日 満88歳
中 村 靄 井 光 義 様
- 2021年 3月 14日 満53歳
祇園町中 秋 原 政 宗 様
- 2021年 3月 19日 満90歳
祇園町中 曾我部 善 一 様

ホームページ開いています。

URL <https://konkouji.jp/>

4月8日現在アクセス数 116,070人

金光寺のひと月

九日	六日	五日	四日	三日	二日	一日
石井ツル子様 五十回忌	金光寺開基 釋了正 祥月 七回忌	橋本ハナエ様 七回忌	橋本ハナエ様 七回忌	金光寺第六世釋超三 祥月	藤木 シナ様 十七回忌	八鞍トシ子様 七回忌
金光寺族 釋善章 祥月	金光寺第六世釋妙順 月命日	菊地 ナミ様 六・七日忌	金光寺仏教婦人会 役員会・会計監査	金光寺第六世釋超三 祥月	藤木 シナ様 十七回忌	八鞍トシ子様 七回忌

十八日	十七日	十六日	十五日	十四日	十三日	十二日	十一日	十日
秋原 政宗様 葬儀	当山前住職釋依章 祥月	秋原 政宗様 通夜	宗祖親鸞聖人 月忌	秋原 政宗様 臨終勤行	野山 浅平様 七回忌	梶原ハツ子様 十三回忌	梶原 信義様 十七回忌	杉本 清一様 二十五回忌
那 須 春男様 臨終勤行	那 須 春男様 臨終勤行	那 須 春男様 臨終勤行	那 須 春男様 臨終勤行	那 須 春男様 臨終勤行	那 須 春男様 臨終勤行	那 須 春男様 臨終勤行	那 須 春男様 臨終勤行	那 須 春男様 臨終勤行

三十一日	二十九日	二十八日	二十七日	二十六日	二十四日	二十三日	二十二日	二十一日	十九日
黒木ケサヨ様 一周忌	靄井光義様 三・七回忌	花田スズ様 三回忌	八鞍恵子家 納骨堂建碑式他	第五回組長会(宮崎市)	金光寺族 釋道導 祥月	吉村アキノ様 三回忌	曾我部善一様 祥月	曾我部善一様 祥月	秋原 政宗様 還骨、初七日忌
秋原 政宗様 還骨、初七日忌	秋原 政宗様 還骨、初七日忌	秋原 政宗様 還骨、初七日忌	秋原 政宗様 還骨、初七日忌	秋原 政宗様 還骨、初七日忌	秋原 政宗様 還骨、初七日忌	秋原 政宗様 還骨、初七日忌	秋原 政宗様 還骨、初七日忌	秋原 政宗様 還骨、初七日忌	秋原 政宗様 還骨、初七日忌

住職ひとりごと

す終予にす入しし寝をば簿そちすは花落で浸にごのて私趣バきた日いまし
。わ算決。っつまで立、をうを。とびちしつ無ろ花くの味タるの没ましは慌
っ、算せてかいいて本×思奮寺脅らてたて常を々れこのバ時でもすた落た
て除書め情りまるな年ていい報迫のこ。いを終、てと除夕間日ず。がちだ
(い草がて眠午す暇け度決な立が観残びふる感え草しは中い夜、着し
住れや完夢を後。もれの算がた完念骸りと時じ、花の思作て長外ふ明まくい
職ば境成でむ九となば事書らせ成に。つ、聞る散なのです。がるなり遅がバ月月
と内、あさ時いいな業を、るし襲掃い見はなると。つ、聞る散なのです。がるなり遅がバ月月
松思地事っぼかいなど計作昨毎たわ除てるあと桜もか。でせりのく早タかを
井の業とっらなとと画ら年日られしいとりとの一。が草きいまこなくバな終
卓ご掃計いて布が思思やな度でとてなる地ま感花気。▼はまかたがまりし思、
郎と除画うい団らっう予けのす気いく桜面せ傷びに木伸せ中たがまりし思、
)でがや間まに、てと算れ帳▼持まてのにんにら見々びん々が、でし、てい少